

千葉市空襲の体験 1

中島澄夫さんの証言

私は1934（昭和9）年7月生まれで、千葉市通り町に家族7人とともに住んでいた。千葉市空襲時は、付属小学校5年であった。現在87歳。

1945年6月10日、確か日曜日であった。家でゴロゴロと寝転んで本を読んでいた。昼頃、空襲警報サイレンが鳴り出したと思う間もなく、すぐ近くで爆弾の破裂する音が始まった。学校で復習した通り、腹這いになり、両手で目、口、耳をしっかりと塞ぎ、様子を見る。10分程で破裂音が遠のいていった。解除のサイレンが鳴ったので、家の外に出て見ると付属小学校の方向に黒い煙が上がっているのが見えた。母親に学校の方に煙が上がっているのだからちょっと見てくると家を出た。

私の家は、当時の町名で言えば通町17番地。現在の銀座通り。ツインビル2号館のある辺り。郵便局の隣り辺り。そこから、京成電車の千葉駅高い所にあり、前は広場になっており、西のすみっこに交番があった。反対向きの角は酒井理髪店、隣は朝日屋菓子店、旗屋さん。その前を通り、富士見橋を渡ると右側に焼き芋屋さんがあった。どんどん先に行く。椅子の修理屋さん、傘屋さん（椎名さんと言った）、長宝堂書店（現在同じ）さんの角、右に折れアスファルトの道から砂利道なる。正面に市立富士見小学校、右手にわたりや文具店、吉原炭屋がある。富士見小の西側に北に入って行く道があって、それを行くと我が小学校の校門が見えてくるが、いつも見慣れている白いタイルを貼った大きな入り口が跡形もなくなっている。校舎は講堂を残して崩れ落ちている。本校（師範学校女子部）は全て焼け落ちている。千葉鉄道機関庫がすぐ隣にあったので爆弾が逸れて、ここが焼け落ちたと思った。ここを先頭にして寒川のほうへ道なりに焼けている。私は、門のところで立ちすくんでいると、ばらばらと同級の生徒が来て、皆呆然とした顔で立ちすくんでいる。校内に入り、校庭を見ると爆弾の落ちた跡がすり鉢状の大きな穴がいくつもあいていた。

学校が焼け落ちてしまったので、しばらくは休校。7月7日を迎えた。夜である。毎夜に空襲警報のサイレンが鳴り、その都度、支度して家を出て安全だろう方へ逃げ出しては何ごともなく家に帰ってくる日が続いた後、あの7月7日また何事もなく帰宅するであろうと庭に掘った防空壕の入り口に砂をかけることもしないで、父の形見の白鞘の軍刀も壕にほおり投げて親子7人で町を出た。都町から加曾利、貝塚の田園に出る頃、町のほうで何か弾けるような音が続いたと思ったら真っ赤な焰と煙が上がり、たちまち町中に広まった。田園の畦道に7人並んで座り、町の焼けるのをまんじりともしないで見つめていた。隅に町から外れた焼夷弾が田圃に突き刺さり、紅蓮の炎を引き上げているのを見ていて、まるでスターマインの花火を見ているようできれいだった。遠く近くに点在する農家の藁屋根が飛び火でも受けたのか、炎と煙をあげている。

やがて白々と夜が明けてきて回りを見ると、あちらこちらに我々と同じ様に畦道に3人、

5人と座して煙が絶えた市内の方を見ている。私は、お腹が空いたのでいつでも腰にぶら下げている焼米入りの袋を取り出しポリポリと食べた。姉弟も皆、一様に袋を取り出してポリポリと音を立てた。水筒の水を飲むとお腹の持ちもよくなった。

明るくなったので家の方へ帰るため、ここはどのへんだろうと辺りを見回すと遠くに水道塔が見えた。あれを目当てに行けば病院坂に出られると、田圃の中を進んで水源橋まで来た。そこで、私はとんでもないものを見て足が竦んでしまった。橋を中心に黒い物体が山のように積みかさなっている、川の土手にもいくつも転がっている。死体だ。おそろおそろ土手に転がっている死体をまたいで歩いた。とその時、私はだれかにガッキと足をつかまれた。心臓が飛びでる程びっくり。足をつかんだ人は男とも女ともわからぬほど煤で染まっていて、「水をくれ」と言った。私は持っていた水筒を投げ出し走って逃げた。

都川にはあちらこちらで同じ様な光景が見られた。やっと病院坂に出た。雨も降らぬのに坂は濡れている。しかも赤黒い色をしている。そこへ重そうな音を立てて1台の小型トラックがやって来て坂を登ろうとしているが、車がスリップして登れないでいる。車の後ろからどす黒い液体が流れ落ちている。なんと積んでいるのは死体ではないか。消防団のかっこの人や警防団の服を着た人が3、4人車の後を押し出し、やっと登って行った。坂の上には千葉医科大学がある。そこへ運ぶのだろうとみていた。坂道の周辺は焼けておらず、以前のままであった。

坂の下に都川が流れている。焼けたのは川の坂と反対方向までだ。坂の下から街を見下ろしてびっくり。遮るものが何も無い。京成電車の千葉駅から国鉄千葉駅までずーと見通せる。間に見えるのは千葉銀行のくすぶった建物だけ。ぐるりと見渡すと参松工業の2本の煙突、千葉興業銀行と周りの煉瓦の垣根の柱だけ美しかった。千葉銀行の回りに植えてあった銀杏の並木も、それこそ根っこが残っているだけ。あとは一木一草、何も残っていない焼野原。

我家のあった辺りにようやく辿り着くと庭の防空壕は見事に焼け落ち、くすぶりの煙をあげている。戸口に立て掛けておいた軍刀は、さやは勿論、柄まできれいに焼けてしまい、焼も戻ってしまい、グンニャリと曲がってしまった。

庭の隅にあった物置の中の練炭二包みがこっこと赤くなっていた。研いでおいた釜のコメは丁度良い具合に炊けていた。それでおにぎりを作って皆で食べた。「今夜はどうしよう」と母親が言う。私は、「少し歩いて見回ってくる」といって、そこを出て「魔の踏切」と言われた千葉駅と本千葉駅の間、富士見橋から真っすぐ千葉街道に出る道を歩き出す。踏切の少し手前に姉と友達であったクリーニング屋さんがポツーンとやけのこっているのを発見。

すぐ引き返してそのことを姉に告げると、姉はすぐ、「石野さんお家だ。頼めば泊めてくれるかもしれない」と。7人ぞろぞろと石野さんの店へ行った。石野さんのお母さんも私の家とは良く往き来していて存じ上げていたので、事情を話すと快く引き受けてくれた。だが、この空襲で一人息子さん（石野隆一）が亡くなられたと言う。石野家で一夜を過ごし、よい

按配に春日町に大きな二階家の空き家があるという情報が入り、そちらに移った。1階と2階に、8畳と6畳の二部屋ずつあり、1階に台所と風呂場が、もちろんトイレもあった。2階は各々押し入れがあり、我々だけでは大きすぎた。薬局を経営していた叔父の紹介で県庁の職員という方とその父親がやはり焼け出され職員宿舎に入るまでとの約束で2階にはいることになった。

8月15日、終戦の日は、久しぶりに学校の焼け跡に行ってみた。それまで学校は休みだとばかり思っていたが、焼け残った講堂でいあわせた生徒だけで授業が続いていたようだ。終戦の翌月には空っぽになった四街道の砲兵隊だか歩兵隊だかの跡地に移動し、兵舎を教室に使って学校が始まった。

当然、列車通学となった。千葉駅（現東千葉駅）から汽車に乗り、次の駅四街道までの20分ぐらいの乗車だ。当時の列車は、機関車の後の炭水車、その後ろに客車4台くらいつないで走る。炭水車とは、名ばかり、大きく割った木材が石炭の代わりに薪を山ほど積んで走っていた。客車はいつも超満員で出入り口から乗り込むのではなく窓から出入りする程込み合っており、ランドセルを背負っている小学生などはとても乗れるものではなく、それならば運転手さんや駅員さんが手を出して炭水車の薪の上に乗せてもらい、又運転室にも入れてくれて走った。途中、単線上の列車がすれ違いする信号所なる所を通るすれ違いの列車がなければそのまま走り出すのだが、反対から列車がくる時は、早く信号所に着いた列車が信号所（現都賀駅）のところだけ複線になっていて、すれ違いができるようになっている。私は、炭水車に乗るのが大好きで蒸気と煙の混じった空気が頬をなでていく風が好きだった。

二度とあんな経験はできないだろうし、又したくはない。あんな状態にしてはいけない。戦争で多くの人が亡くなった。家族が、友人が亡くなったり、ばらばらになったりすることは二度とあってはならない。これからも皆が幸せになるように祈っている。私の戦争体験はまだ小学生であったので、現在ほど身に堪えなかったかもしれぬ。ずっと後になって聞こえて来たのは、女子師範学校舎が爆撃されたのは、学校とは名ばかりで、中では飛行機の翼内のリブの製作工場のためだった。そこで女子師範になるべく多くの女性が命を落とした。戦争は絶対にしてはいけない。